

◆歴史のなかの「体罰」を「体感」すること

自分という人間の気の弱さには確信が持てているので、戦時中の軍隊の話を知ると怖くてたまらない。暴力を振るわれる側としてではない。暴力を振るう可能性のある側として、である。

振るわれる側であればそれほど怖くはない（本当は怖いけれども）。少なくとも、自分を恥じることはないだろう。そのときに自分のなかにどんな感情が生まれるかは分からないけれども、それは恥とは無関係の感情であるはずである。

懼れるのは、暴力を振るい、他人に苦痛や屈辱や強いたのにも拘わらず、それに自分にとって全く何の意味がなかったことに後で気づくことである。私はあまり自分を信用していない。例えば周りに流される可能性など、特定の立場や状況がありさえすれば、暴力を振るいうる側にいると思う。

子供の教育などでは、正義のために勇気を奮うことを称えるのが重要なかもしれないが、自分の気の弱さを考え、また多くの人も正義のためにいつも勇気を奮うわけではないであろうことを考えると、強くはない人間がそれほど勇気を奮わなくても維持できるような、悪くない社会の仕組みを作ることのほうが重要だと思う。

そうしたこともあって今回は、近現代史を「体感」するための要所のひとつとして「体罰」について考えてみることにしたい。

大学院の博士課程のころに行った戦争体験の聞き取り調査で、軍隊の内務班での体罰の屈辱を話してくれた人がいた。戦後は村で教育長をやった人で、お家で夕食を頂きながらのなごやかな聞き取りのはずだったが、彼は話の途中で絶句してしまった。私も挟む言葉がない。聞き取りテープには沈黙ばかりで何も残っていないが、何かが「聞けた」ような気がする。こうした経験は、聞き取り調査をする人であればよくあるのではないかと思う。

彼らの受けた暴力が、どれだけ長い間彼らを苦しませ続けてきたか、すでに私たちは「体感」しにくくなっている。私たちの社会は兵士たちの加害そして戦争責任に興味を示しがちだが、もちろん彼らも戦争の被害者である。

ここでは、自分の大学時代に手がかりを探してみよう。

大学の時に自分が所属していた弓道部は、都学連（東京都学生弓道連盟）リーグの二部に属してはいたが、それでも一部リーグの強豪校との実力差は歴然としていて、そうした強豪校との練習試合では、相手の「二軍」が来るのが常であった。彼らの「一軍」は同じ週、別の強豪校と試合しているわけである。

二軍は一年生主体で構成されていたけれども、来年・再来年にはチームの主力となる全国レベルの選手たちである。だから必死だ。私たち試合相手のことなど眼中になく、むしろチームのなかにいるライバルのほうが「敵」となっているような人たちである。

大学弓道の試合では、4射ずつの「立」を5回繰り返す。ひとり20射を4人ずつでひと

組とし、双方二組ずつ出し合って合計 160 射の的中合計数を競い合う。強豪校ならば、試合での 20 射皆中も珍しくなく、ほぼすべての選手が 18~20 中のあいだの成績に納まる。試合がもつれ、主将が放つ最後の 1 射が勝敗を決めることも少なくない。

彼らにとっては格下との試合だったはずだが、大学の対校戦という緊張感もあってか、一年生のひとりが調子を乱し、途中で 4 射 1 中という成績を出してしまった。本番のリーグ戦であれば試合をぶちこわしてしまうような成績である。弓道は、1 射 1 射を細心の注意を払いつつチーム全体で的中数を積み上げてゆくような競技なのである。

で、「体罰」である。彼はこの立の後、次の立までのあいだ、弓道場の裏側に連れて行かれて上級生から体罰を受けていた。見えないところであれ、パシッパシッという音は隠しようがない。というよりも、その音を、他の選手や相手校の私たちに聞かせようとしていた。これにさらに、人格を否定するような罵声加わる。件の一年生は泣きながら「ハイッ」「ハイッ」と叫んでいた。

部の監督や主将などという偉い人はもちろん二軍の試合には来ず、二軍を率いていたのは、見た目にもどこかパツとしない四年生であった。ここにいるのだから、もちろん彼は一軍選手になれなかった四年生である。とはいえ、ほんの数年前には彼も高校時の全国大会優勝メンバーだか、どこかの大会の最優秀選手だかの経歴をぶら下げて意気揚々と大学に入ってきた元エリート選手だったはずである。

罵声は、そうした彼の性根が今やすっかり腐ってしまったことをうかがわせるような内容のもので、このような体罰や人間性を否定する罵声がこの一年生の成績を向上させるわけがないと私たちは思った。そんなことしても意味がないのになあと萎えつつも、試合は進んでいった。

ところが、である。不思議なことに、このビンタの後、当該の一年生の「射」が鮮やかに変わった。彼は残りの 12 本を全部中ててしまった。のみならず、この引き締め効果は他の一年生にも波及して彼らの的中を促し、私たちは完全に圧倒されて負け試合となった。試合後の全体挨拶のとき、私たちに対してなんともいえない優越感を隠そうともしなかったのはあの四年生であり、当該の一年生はといえば、さきほど殴られて涙を流していたことなどおくびにも見せず毅然としていて、私たちからいっそう遠い存在になってしまったように思われた。

この彼が次の年やその次の年に主力選手として活躍したかどうかは知らない。この「喝入れ」が（手段はともあれ）選手としての成長の機会となったのであれば、おそらく良い選手になったかもしれない。逆にもし彼が「ダメな選手」になったとしても、体罰には、この日のような短期的な「効果」があることが体で学習されたはずなので、「二軍を率いる四年生」になった後、その継承者として、同じように後輩にビンタと罵声による喝入れをしたかもしれない。もちろんそれは分からないが、少なくとも「喝入れ」の短期的な効果だけはこの日、確実に私たちの目撃するところであった。

ようするに、体罰には「効果があった」のである。もちろんこれは今から 20 年以上前(1990

年代前半)の話で、戦争が終わって50年たない時代のことである。「戦争」による圧倒的な暴力の「継承」を基準にしたとき、この「1990年代前半」は、現在(戦後70年以上)とはやはり違う時代なのだろう。

それから10年したころ、ある論文を書こうとして連合赤軍事件におけるリンチ殺人事件(1971年暮れから72年初春に起こった事件)について調べたときにも、彼らのなかに戦争の時代から連なる体罰の「伝統」を感じたものだ。彼らは仲間のなかでターゲットを決め、その者に皆で「総括援助」という名の制裁を行っていた。手記を読む限り、このグループのリーダーは、体罰が時に人間を劇的に成長させることがあるという考えを持っていたようだ。この学生たちは、軍隊経験者の父親から体罰を受けていたかもしれないと思う。

さらにまた、これを書きながら思い出したことがある。「おやじにも殴られたことがない」という有名な台詞を残した1979年のアニメ『ガンダム』の主人公アムロは、物語の冒頭で、爆撃で家族が全滅して茫然自失状態のガールフレンドに「しっかりしろ」と往復ビンタを容赦なく食らわせていた。「メカ好きのおとなしい少年」という設定にもかかわらず、である。「殴られたことがな」くてもその「効果」は知っていたのか。このアニメでは、ほかにもいくつか印象的なビンタのシーンがあった。

そして、現在の社会でも体罰はあるだろうか。体罰には効果がある、と(密かにでも)思われ続けているだろうか。

幸いなことに、私たちの社会は「暴力による喝入れ効果」の「継承」にほぼ失敗している。統計を見ても少年犯罪、とくにその暴力犯罪は減ってゆく一方であることを背景に、物理的な暴力ではなく、いじめなど陰湿化した暴力が蔓延するようになったともいわれるが、体罰は確実に減ってきている。そして、私たちの社会のルールは体罰の存在を許さない。

とはいえ、だからこそ体罰が「効果的」であることもありうる。「継承」の仕組みは先ほど述べたとおりである。そして、筆者の同僚でゲーム理論の専門家が教えてくれたのだが、ルールを皆で守っているときの方が、ルール違反から得られる利得が大きくなるということがあるそう(なるほど、皆が予防接種を受けてくれれば、自分は受ける必要はない、と考える人が出てくる)。体罰に対する社会的な押さえ込みが成功すればするほど、逆にその「劇的な」効果が増すということも残念ながらあるかもしれない。

これまで日本軍(というか軍隊一般)における体罰は、その陰湿さ・歪んだ精神によって理解されてきた。あの弓道の試合の日の私たちもまず始めに、そう理解した。つまり体罰は、一軍には入れなかった品性下劣な上級生による後輩いじめ、憂さ晴らしなのではないかと考えたのである。丸山真男のいう「抑圧委譲の原理」を思い出す。つまり、他者から受けた理不尽な暴力を、より立場の弱い別の他者に向けるという説明だ。この原理により、軍隊組織において最も弱い立場にいてその被害者である兵卒が、占領地の住民に対しては容赦のない加害者となるということが理解できる。

おそらくそれは「体感」しなくても頭で理解できる原理である。そうした意味で、丸山真男の説明は普遍的であり、透徹したものである。しかしこの説明は、最初の「抑圧」が発生する（した）場所を特定でき（てい）ない。またそれが特定できたとして、その特定の場所を制圧すれば、暴力による抑圧がなくなるとも思えない。

暴力を憎む人々にとっては極端なのかも知れないが、むしろ必要なのは、体罰の「効果」を体感することなのではないかと考えてしまう。こちらの側面に対し、われわれの理解が追いついていない。体罰にすらある種の「合理性」があるということ、そのメカニズムの存在を知的に認めなければ、いくら体罰をなくそうと皆で努力をしても、その密かな「継承」を許し続けることになるのではないか。

例えば軍隊のなかで、インテリ（田村高廣）とやくざ（勝新太郎）とがリンチや暴力を通じて友情を深めるという映画『兵隊やくざ』。1965年のこの映画の画面にはリンチや暴力じたいを憎むという感覚がなく、（映画としての面白さはあれ）その根底に流れるものを私は理解できない。これが当時世の中でヒットしたということを考えると、私たちの「戦争の記憶」の継承と断絶にも、さまざまな側面があることが改めて分かる。

歴史のなかにある反知性的なものでさえ、これを知的に理解するという必要があり、それもまた、この連載における「歴史を体感すること」の目的のひとつである。